私たちの思い出の場所

レストラン フラワーメイト

池田興治さん

思い出は語りつくせない あっという間の50年

右から、店主の池田興治さん、妻の紀佐子さん、長男で二代目の兼一さん。兼一さんは本学の経済学部出身です。

思い出の場所はありますか

1973年7月7日のオープンから50周年を迎えました。当時私は24歳。長崎市内で店を出したいと思い、現在地で飲食店を営んでおられた前オーナーのもとを訪ねました。店舗を売りに出していましたが、中華料理店だったため厨房が使えず断念。その後前オーナーが店を洋食店に切り替え、私を探しに来てくれました。しばらくして「フラワーメイト」という店名共々譲り受けました。

まだその頃はコンビニもなく、学食の規模も小さかったと思います。客足は徐々に増えていきました。娘と息子にとって店は自宅同然です。お客さまたちに可愛がってもらい、キャンパスでは虫取りをしたり、大学生の皆さんに遊んでもらったりしていました。

オープンから9年後、長崎大水害が発生しました。水道は止まったものの、店自体に大きなダメージはなく2日後に再開。大変な状況の中、食事を提供することが使命だと思い、2軒隣のお宅から井戸水を分けてもらってカレーを仕込みました。するとたくさんの方が食べに来てくれました。

現在のビルに建て替える以前の旧店舗前にて。興治さんとまだ幼い娘さん。

店にコピー機やインベーダーゲーム、ジュークボックスを置いていた時期もあります。2階が焼肉屋だったことも。その時代に合わせて、店もメニューも変わっていきました。形を変えながら今でも残っているメニューは、フラワーランチやチキンスパ、オムライスなどです。お客さまそれぞれにお気に入りの定番メニューがあるので、どれも削ることができません。

50年はあっという間でした。かつて学生だった常連さんが久しぶりに来店してくださったり、バイト生のみんなから記念品をいただいたり、たくさんの方がフラワーメイトを愛してくださってありがたいですね。店を続けて来られたのは私が健康だったから、そして運も良かったんでしょう。「美味しいものを提供しているからだよ」と言ってくれる息子と、今は一緒に厨房に立っています。お客さまのために、“私の味”ではなく“フラワーメイトの味”を、これから先にもつないでいって欲しいですね。

人気メニューのトルコライスとオムライス。学生客の中には「最初に食べた時の感動を伝えたい」と、後輩20人分のオムライスをオーダーした強者も。

アンケートのご協力のお願い

広報紙Chohoへのご意見・ご感想をお寄せください。①面白かった記事 ②本紙に対する意見・感想 ③今後取り扱ってほしい内容 ④長崎大学からの情報発信全般についての意見・感想 ⑤本学とのご関係 ⑥年齢 ⑦氏名（ふりがな） ⑧郵便番号 ⑨住所 ⑩電話番号を明記してください。

◎ハガキ／〒852- 8521 長崎市文教町1-14 長崎大学広報戦略本部 宛

◎ ＦＡＸ／095-819-2156 ◎ メール／ kouhou@ml.nagasaki-u.ac.jp

◎ 応募締切日／2024年2月末

読者プレゼント

コースター（4枚セット）

アンケートにご協力いただいた皆様の中から、抽選で5名様に「コースター（4枚セット）」をプレゼントします。素材の透明感と手書き風の味わい、そして特徴的な箔押しパターンが魅力的なコースター。どんなシーンにも馴染む和洋折衷のデザインは、ガラスコップはもちろん、湯呑みやマグカップといった種々の器にぴったりです。左上から時計回りにたんぼぼ、あさがお、鯛、きんかんの全4種類。長崎大学のロゴが入った桐箱でお届けします。

※当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

Choho 直接送付サービス受付中!

広報紙Chohoはその多くを、各学部同窓会様の会報誌送付の際に、直近の号を同封してお送りさせていただいています。そのため、読者の皆様には、必ずしもChohoを毎号お届けできないケースがあり、「前号のChohoも読みたい」「定期送付を希望」といったお声をいただいております。そこで、ご指定の住所へChohoを直送させていただくサービスを行っています。

上記サイトへアクセスいただき、ご登録をお願いいたします。皆様のご利用をお待ちしております。

編集後記

10月1日、永安武教授が長崎大学第16代学長に就任いたしました。そこで今回の特集では、永安学長の描くこれからの長崎大学について、教員と学生がそれぞれお話を伺いました。紙面には掲載できませんでしたが、学生広報スタッフからの「学長が変わると私たち学生にはどんな影響があるのですか？」という唐突な質問にも「徐々に僕のカラーが出てきた時に学生の皆さんも変わっていってくれればと思うけど…基本的には自由に過ごしてよ」と気さくにお答えいただき、横にいた私たちもホッとしました。学長の座右の銘は「笑う門には福来る」なのだそうです。確かに常に笑顔でお話しいただいた学長ですが、今回の取材を通して、その笑顔の中に長崎大学の課題を見据え、より良い未来へと導かんとする熱い想いと固い決意を感じました。そして、長崎大学の明るい未来を示すかのように、学長と理事の写真撮影も、前日の大雨から打って変わって晴天に恵まれ、笑顔溢れる場となりました。この時の学長たちの素敵なオフショットはWeb Chohoで公開しています。ぜひご覧ください。

（広報戦略本部 中村）

長崎大学　学長室

2023年10月1日、永安武教授が長崎大学長へ就任いたしました。長崎大学のHP内にある「学長室」のコーナーでは永安学長からのメッセージを発信しています。

https://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/guidance/president/index.html

長崎大学SNSサイト

X　Facebook　Instagram　YouTube

Nagasaki University Choho
Choho（チョーホー） Vol.83
2023年11月1日発行
Choho企画編集会議
長崎大学広報戦略本部
〒852-8521　長崎市文教町1-14
TEL.095-819-2007
長崎大学 検索
https://www.nagasaki-u.ac.jp/

国立大学法人 長崎大学 NAGASAKI UNIVERSITY

Nagasaki University Choho

人を結ぶ　地域と繋ぐ
［長崎大学チョーホー］

Web Choho

Vol.83
2023年11月1日発行

「人を結ぶ　地域と繋ぐ」をコンセプトに、長崎大学の思いや姿、描く未来などを共有し、多くの皆様に長崎大学へ関心をお寄せいただけるような広報紙を目指します。

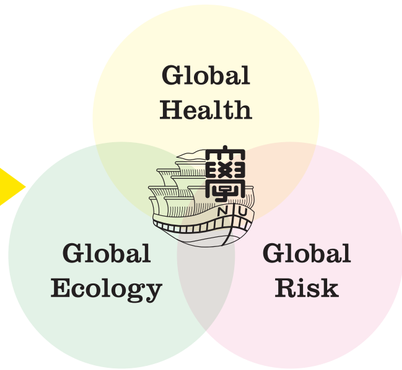
長崎大学医学部出身の永安武学長は、呼吸器外科のドクターとして活躍。当時作製した本人そっくりのフィギュアは、学長就任を機に学長室へ。

新学長 永安武 新体制始動！

2023年10月、新体制が発足した長崎大学は新たな航海へ漕ぎ出しました。
世界レベルの研究および人材養成を進めると同時に、
地域社会とのより強固な連携を目指すためのビジョンとは？
新学長として舵取り役を担う永安武がお話しします。

キーワードは融合。

Fusion



新学長が描くグランドデザイン

長崎大学長

永安　武

NAGAYASU Takeshi

1962年佐世保市出身。1987年長崎大学医学部卒業後、同大学医学部第一外科入局。同大学大学院医歯薬学総合研究科腫瘍外科学（旧第一外科学講座）教授、長崎大学病院副院長、医学部長、ハイブリッド医療人養成センター長などを歴任。2019年10月長崎大学理事に就任。2期4年にわたって研究・国際および社会連携等の活動促進を担う。毎朝4時半起床。趣味はゴルフ、映画鑑賞、マンウオッチングなど。

グランドデザインを推進するための3つのキーワード

――まずは本学の今後あるべき姿について、どのようにお考えでしょうか。

永安　研究担当理事を務めてきた経験から、本学の発展にはやはり研究力が必須だと考えています。ただし、もう一つの大きな柱である教育が重要ではないということではありません。研究と教育は密接に関連していて、最先端の科学を追求する国立大学としては、良い研究があるからこそ良い教育ができるのだと考えています。ですので、今後は更なる研究と教育の融合という観点から、新しい知見や技術をどう生み出し、どう社会実装させていくのか、そしてそれを担う人材をどう育成していくかが大きなテーマです。

――そのためにはどのような条件が求められていますか。

永安　まずはグローバルな視点です。本学は感染症や放射線の研究分野において、国内はもとより世界でも屈指のトップランナーで、世界レベルの研究を展開し人材も養成しています。一方、それら研究成果の社会実装という点での、産業の活性化といった地域貢献の分野については改めて考えるべきだと思います。パンデミックやロシアのウクライナ侵攻などの地球規模の課題に対して、本学の研究成果を国内外の地域社会にどう役立てていくか。特に長崎においては、新しいものづくりに対して投資が進められるべきタイミングですし、私たちアカデミアの手腕が問われています。

――長期グランドデザインについてお聞きします。どのような具体策を掲げたのでしょう。

永安　もちろん、本学の目標に掲げている「プラネタリーヘルスの実現※」ということは重要なことです。これを実現していくため、大きな3つの視点となるキーワードを考えています。それが“グローバルヘルス”“グローバルエコロジー”“グローバルリスク”です。1つ目の グローバルヘルス については、ご存じのとおり感染症や遠隔医療など、引き続き本学の強みを活かした研究・開発は継続しつつ、ここに理工学分野を加え、地域企業と連携した医療機器の開発などにも注力したいと考えています。2つ目は、海洋総合研究を軸にした“ グローバルエコロジー ”です。すでに構想の核となる、産官学連携プロジェクト「ながさきBLUEエコノミー」が始動しました。海洋生物や周辺環境、生産者の負担軽減に配慮した養殖産業の活性化策として、国からも高い評価を得ており、観光や人口流出の課題など、経済学部等を中心とした人文系の分野との連携による地域経済への貢献も期待しています。ほかにも先端創薬イノベーション、洋上風力発電、海洋および大気汚染リスクなど、環境やエコロジーの観点から本学の特徴を活かせる異分野連携の取り組みはとても多様です。

※長崎大学が考えるプラネタリーヘルス：「地球の健康」を支え続けるために有効な「答え（解決策）」を探求し、私たち自身の意識変容、行動変容を促す取り組み。

3つ目は“ グローバルリスク ”です。本学には原爆後障害医療研究所（原研）、長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）など様々なグローバルリスクに対応できる、本学にしかない組織が揃っています。たとえば原研が持っている生命医科学分野のノウハウは、チョルノービリ原発事故や福島などの現場で社会実装されてきました。今後はRECNAに加え、多文化社会学部等の人文系の分野と新たな共同研究・人材育成にも取り組んでいただきたい。そうすれば新しい発見や知見につながるのではないでしょうか。

――研究と教育などそれぞれの研究分野同士が融合し、グローバルな視点で大学運営を進めていくことになりますね。

永安　まさにそのとおりです。ありきたりな表現かもしれませんが、みんなで創る、共創していく。長崎にはお人よし文化があります。色々な文化や考え方をまずは受け入れる風土を、新しい長崎大学の創造にも取り入れていきたいと思います。先ほど話した3つの視点での取り組みは、全て良い研究と良い教育の融合によって成り立っています。これを踏まえ、10学部7研究科1学環の学内組織、そして学外組織との連携、これら全ての融合により、世界的プラネタリーヘルス教育研究拠点になることを目指したいと思います。

肺移植手術を執刀中の永安学長。

期待感こそが未来を拓く原動力

――国際競争力の低下が叫ばれています。

永安　全国の大学が頭を抱えている問題です。私は研究者だけに良い研究をしなさい、良い共同研究をしなさいと言うのでは限界があると思い、研究担当理事だった頃、研究者や大学全体の研究活動を活性化させる役割を持つURA（リサーチ・アドミニストレーター）を増員しました。これからはURAを“つくる・育てる”仕組みも構築していきたいですね。いずれにしても本学の研究力を行政や民間にアピールし、期待感を高めていきたいと考えています。

――まずは広く知ってもらうことが重要なのですね。

永安　もちろん個々の研究者には、現状維持に留まらず柔軟な発想で学部や他の研究との垣根を越えていただきたい。先ほどもお話ししましたが、新しい研究や面白い研究は、融合から生み出されるのですから。令和6年4月に新設される「大学院総合生産科学研究科」には期待しています。工学研究科、水産・環境科学総合研究科を一つにまとめ、情報データ科学系の専攻を新設することにより、さらに横断的な研究が増えるでしょう。

――長崎は100年に一度の変革期と言われています。

永安　長崎駅周辺の再開発やスタジアムシティの建設など、大規模な予算を投じて長崎をよくしようとする動きや企業精神に接しています。私自身とてもワクワクしているんですよ。大きく変わろうとしている長崎の期待に対して、アカデミアとしてどのように応えられるのか。学生にもそういった環境の中で学ぶことにワクワクしてほしい。その期待感こそが、未来を拓く原動力になるでしょう。

聞き手

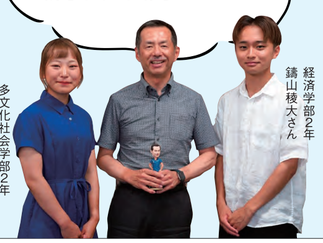
長崎大学キャリアセンター

矢野　香　准教授

専門は心理学・コミュニケーション論。NHKでキャスターを17年務めた後、2014年4月より現職。

Questions from Students ?

私たち学生広報スタッフが新学長に質問しました！



経済学部2年 鑄山稜大さん

多文化社会学部2年 高田春歌さん

どのような教育環境を目指していますか？

有意義な学びを実現するためには、Curious（＝好奇心）が大切です。本学にはプラネタリーヘルス関連の授業やモジュール科目など、好奇心のタネを見つけられる機会がたくさん設けられています。たとえばプラネタリーヘルスは基礎的な学問だけではなく、“融合”のキーワードでもあると思います。各学部で専門性を高める前提として、プラネタリーヘルスマインドを持つこと、そして皆さんが好奇心を抱くことができる教育環境を大学全体で整えたいと考えています。

長大生時代の思い出を教えてください

大学時代は医学部のサッカー部に所属していました。家庭教師や飲食店でアルバイトもしていたので、試合が終わった直後にシャワーも浴びないまま出動したことがあります。今となっては考えられません（笑）。大学卒業後、同部の監督だった頃、ラグビー部と協力して浦上天主堂横のグラウンドに手作業で芝生を植えました。たくさんの思い出があるグラウンドが、一面緑色になった時は感動しました。

長崎でお気に入りの場所はありますか？

県庁付近の港の景色です。やはり海は長崎の大きな魅力だと思います。以前は大島や上五島など離島での診療や、タンカーや護衛艦の試験航海でシップドクターをしていたことがあります。湾内を行き交う船を見ていると、その頃の思い出がよみがえります。

長大生に求めることは？

普段の学びは地域社会や企業との連携など、様々な問題の解決や発展につながっています。どのように貢献できるのか日ごろから思いを巡らせて、また“面白そう”と感じることを大切にしながら学んでください。そうすれば良いアイデアが生まれるでしょう。他分野の人たちとも積極的に交流・融合してほしいですね。考え方が広がるだけではなく、自分を客観的に見つめ直す機会にもなるはずです。一方、時には孤独になることも、決断力を磨いてくれるでしょう。他者との交流、そして自分と向き合う時間。より良いバランスを意識しながら、楽しく学生生活を送ってください。

Vision

理事7名が語るビジョン

Questions

① 自身のビジョンにキャッチフレーズをつけるとしたら？

② 影響を受けた書籍は？

総務担当　森口勇

① 魅力と活力のある、輝ける大学を目指して

MORIGUCHI Isamu

総務担当理事は、端的に言えば大学の組織運営の縁の下の力持ちのようなポジションです。魅力と活力のある大学となるように、学生が楽しく学び研究できる環境、および教職員が生き生きと働ける環境を整えるための様々なルール作りや運営業務を担っています。

ついては、地域社会の発展に貢献するとともに、世界に新しい知や技術を発信し、また、グローカルに活躍する人材を輩出する、輝ける大学として、長崎大学がそのポテンシャルを大いに発揮できるように、教育研究および業務環境の整備や円滑な運営に貢献していきたいと考えています。

教学担当　中村典生

NAKAMURA Norio

① 長崎大学で学ぶ喜び、強みを実感できる教学体制を

② 原口庄輔著『プラス思考のすすめ―人生を楽しくする秘訣』

担当分野は①教務②入試③高大接続・入試広報④地域教育連携に関することです。高校生が本学を選択するよう魅力ある情報を届けること、実力をいかんなく発揮できる入学者選抜を実施すること、入学後、何を学んでどんな力をつけ、それをどう価値づけるかという一連のプロセスを構築することがミッションということになります。

また同時に、地域の知の拠点としての役割もあります。例えば地域の方々に、大学での最新研究の体験をしてもらったり、リカレント教育を提供したりなども大事な仕事です。長崎大学で学びたい、という気持ちを多くの方に持ってもらえるような教学システムを構築し発信します。

財務・施設担当　平野浩之

HIRANO Hiroyuki

① 「選ばれ続ける大学」としての転換（パラダイム・シフト）

② 渋沢栄一著『論語と算盤』

BSL-4施設の運営経費などの必要不可欠な予算の確保は当然として、第4期の財政支援の方針に基づく部局の組織改革を構想段階から支援します。そして18歳人口の減少や若年層の県外流失が著しい長崎の将来を見据え、「選ばれ続ける大学」としての施策を推進し、予算確保につなげます。

また、施設の老朽化や狭隘化の解消は喫緊の課題です。コロナ禍において、現存施設がいかに今の学びに対応出来ていないか明らかとなりました。既存のキャンパス計画を見直し、将来を見据えた学習や研究環境の整備を推進するため、民間の活力も積極的に導入するなど、地域に開かれた大学としての機能も強化します。

研究・戦略企画担当　西田教行

NISHIDA Noriyuki

① プラネタリーヘルスの実現へ向けた全学的取り組み推進

② 吉本隆明著『言葉からの触手』

地域の中核大学として、本学の研究力を向上させプラネタリーヘルスを実現していくことが私のミッションです。さらに産学連携やベンチャー創出などを進め、結果として本学の社会的価値を高め、世界での存在感を強めることが目標です。本学には、多くの優れた人材がいます。研究を通して大学院生を教育し、新時代を担う次世代の研究者が素晴らしい研究成果を上げるには、“アイディア・人・金・スペース・時間・そして努力と運”が揃う必要があります。私の役割は耳をよく澄まし、未来を鋭く見つめ、研究者が必要としているものを大学として提供することに尽力することにあると考えています。

学生・国際担当　伊東昌子

ITO Masako

① 学生の夢を支援する学修環境整備と学内国際化意識の浸透

② シェリル・サンドバーグ著『LEAN IN(リーン・イン)』

学生担当の主な業務は、学生が充実した大学生活を送り、将来の夢を達成できるように生活支援を行うことです。特に注力したいことは、留学生の受入れ増加です。より多くの留学生に長崎大学を選んでもらうため、サポートのあり方を検討し就職支援にも力を入れたいと思います。

国際担当の主な業務は、海外の大学や研究機関との連携強化、教員の海外派遣、外国人研究者の受入れ、海外拠点の開拓などを行うことです。特に、プラネタリーヘルスに関連した国際連携は重要です。多様な文化や価値観を尊重し、国際化の意識が浸透した地域や世界に貢献できる大学になればいいと思います。

社会共創担当　田川伸一（非常勤）

TAGAWA Shinichi

① オープンイノベーションによる社会貢献の推進

② ピーター・F・ドラッカー著『経営者の条件』

私は長年「長崎県・長崎県産業振興財団」において、産業振興、特に企業誘致に取り組んできました。そのため、大学で取り組まれている様々な研究やプロジェクトが、国内外から大変注目されていることをよく承知しています。

第4期中期目標では「人材養成機能や研究成果を活用して、地域の産業の生産性向上や雇用の創出、文化の発展を牽引し、地域の課題解決のために、地方自治体や地域の産業界をリードする」とされています。今後も、ますます高い評価を得られる研究やプロジェクトを推進できるよう、私も内外の企業の皆様などとの“繋ぎ役”の役割を果たすことができればと思っています。

広報・基金担当　才木邦夫（非常勤）

SAIKI Kunio

① 長崎大学の今をビビッドに発信していきます

② 小田実著『何でも見てやろう』

広報は端的に言って、長崎大学というブランドを確立し、社会的評価をいかに高めていくかに尽きます。その結果、受験者増につながり、ひいては長崎大学の資金的なサポーターの増加につながる、そういう好循環をつくりあげたいと思っています。そのためには受験生から保護者、さらに企業経営者などのステークホルダーごとに的を絞った、情報発信が欠かせません。本学の先端的な研究はもちろん、100年に一度の街づくりといわれる事業が進みながらも、一方で疲弊する地域社会の発展を目指す本学の粘り強い取り組みなど、今をビビッドに発信していきます。

Research

［研究］

2023年3月12日にはシンポジウム「One Welfare 動物介在療育法の可能性」を開催しました。報告書はこちらから。

Nagasaki University Research

多文化社会学部

賽漢卓娜（サイハンジュナ）

教授

人間の心と体を癒す かしこい馬たちに秘められた力

愛隣会の牧場にて、賽漢卓娜教授（写真右）と友人のようにふれあう介在馬。

「馬に関わる人間のライフストーリーにも関心がある」と賽漢卓娜教授。18歳まで遊牧生活を送った父親がのちに中国北京の大学教員になったことから、北京市で育ちました。「夏休みに内モンゴルに帰省した時、父が馬に乗る姿をカッコいいと思いながら見ていました」。

家族社会学・移民研究が専門の賽漢卓娜（サイハンジュナ）教授は北京出身。中国のモンゴル民族で、両親のルーツである内モンゴルでは草原で人と共に生活する馬を目にしていました。それだけに日本を含む先進国で垣間見た家畜の自由が制限された飼育環境には違和感を持ったとのことです。そもそもモンゴルの遊牧民にとって、馬はどのような存在なのでしょうか。

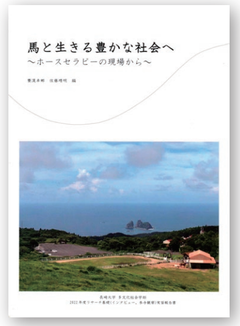
「モンゴル草原は、日本とは広さや自然環境が異なるため、馬と人間との距離感や生活環境が異なるのは仕方がないことかもしれません。日本では馬は歴史的に見て、畑を耕したり物を運んだりするための道具という側面が強かったと聞いています。モンゴルでは一緒に移動しながら暮らす身近な友人です。馬はとてもかしこい動物ですし繊細でもあるので、人に飼われるのではなく、餌になる豊富な草を求めて広大な草原を自由に動き回る生活をしています。何日も帰ってこない時は、“お宅の馬は百キロ先の林の中にいますよ”と、ほかの遊牧民から位置情報を教えてもらうこともあるんですよ」。

元気にじゃれ合う馬たち。愛隣会ではスタッフの不在時にも、柵の範囲内で馬が自由に動けるようにするなど飼育環境を改善。どのような変化があるのか検証が進んでいます。

古くからモンゴルを含む遊牧地域やヨーロッパなどの馬と共存する地域では、馬は友人として人間を心身ともに癒してくれていました。そして、医療分野では、ホースセラピー（療育乗馬）がドイツに発し欧米を中心に発展します。日本ではホースセラピーは発展途上にあり、ごく一部に導入されているものの、利用規模はまだまだ小さい現状だとか。賽漢卓娜教授は続けます。「現代の日本人の多くは、乗馬クラブや牧場にいる馬を見て、高嶺の花だと感じているのではないでしょうか。少なくとも身近な存在ではないと思います」。

賽漢卓娜教授は現在、門司和彦教授（熱帯医学・グローバルヘルス研究科）、岩永竜一郎教授（医学部保健学科）、佐藤靖明准教授（多文化社会学部）、絢野ナチン氏（社会福祉法人南高愛隣会ホースセラピー研究センター室長）との共同研究「ホースセラピーにおける馬と障がい者の関係性に関する研究」に取り組んでいます。1992年にホースセラピー事業を開始した南高愛隣会では、8頭のセラピー介在馬を飼育（2023年10月時点）。本研究は、愛隣会が蓄積してきた、厩舎での馬と人間との関わりや活動に関するデータを分析および検証。障がい者の治療と生活改善を主な目的にしてきたホースセラピーを広範囲に認識してもらい、様々な層の人たちが利用できる未来に近づくための一歩と位置付けています。愛隣会への聞き取り調査から、どのような事例が見えてきたのでしょうか。

「脳障害があり右腕が動かないお子さんがいました。乗馬で体幹が鍛えられ、その後引き馬など馬の世話を通じて徐々に右腕が使えるようになったそうです。また、お子さんの成長した姿を見て、母親が誇りを感じたとも聞きました。ほかにも道具の洗浄や厩舎の清掃といった介在活動の中で、得意分野が見つかるなど様々な事例が挙がっています。馬には人間の心を癒し、埋もれている能力を開発してくれる力があります。馬は基本的に穏やかですが、人を見ていますし、人と同様に機嫌の悪い時もあります。また生活環境が悪いと不安定になってしまいます。馬との相互理解が進み、馬の生活環境の整備がされていけば、馬と人との共存のかたちはより多様化していくでしょう」。



2022年、多文化社会学部のリサーチ系科目『リサーチ基礎（インタビュー、参与観察）』の一環としてフィールドワークを実施。愛隣会が運営していた長崎市いこいの里あぐりの丘の乗馬施設（当時）を訪ね、学生24名とホースセラピーの現場を多様な視点から調査。ホースセラピーの多面的機能や、人と馬との関係性に関して得られた知見を報告書にまとめました。

馬を友人という賽漢卓娜教授。眼差しの先には、かつて見たモンゴルの大草原や悠久の歴史絵巻が広がっています。

Circle
［サークル］

Circle Interviews
学生広報スタッフがインタビュー

［吹奏楽部］
（since 1979）

縁の下の力持ち “キカク号”にまつわる意外な真実！

今回は学生広報スタッフで現役部員（2021年入学）の私が、2003年に入部され、現在は私立瓊浦高等学校で吹奏楽部の顧問を務められている足立陽平さん（吹奏楽部のOB）にお話を伺いました。

西村 聖さん
経済学部3年

年2回開催する演奏会は最大の発表の場。3、4カ月で10曲を仕上げます。また、演奏会にかかる経費は、部員自ら足を運んで集めた広告協賛費や部費等で賄っています。

――当時の吹奏楽部の活動について教えてください。

足立さん　練習は週3（月木土）で、九州内の大学では少ない方でしたね。当時は合奏の主な練習場だった中部講堂に空調がなく、暑くて暑くて…。私が大学3年生の時に空調の効く学生プラザができた時は感動しましたね。それと楽器の運搬用に、部で軽トラを所持していたのは吹奏楽部ならではじゃないかな。

――空調がない中部講堂は考えたくないです…。運搬用の車は何年かごとに買い換えていて、今私たちが使っている軽バンは“キカク号”と呼んでいます。

お話を伺った足立陽平さん。
（2007年3月卒業）

足立さん　当時の軽トラも”キカク号”と呼んでいましたよ。キカクさんという先輩が、初代の軽トラを購入したことが由来だと聞いています。お会いしたことはないのですが。

――初めて知りました！ 代々引き継がれてきた名前なんですね。足立さんがいらした頃の部員数は、どれくらいだったのですか？

足立さん　100人以上いました。人数制限のあるコンクールには出られない部員もいたので、イベントなどで演奏をする依頼演奏班を作りました。船の出港式やマーチングパレードへ行って演奏するので、活動費稼ぎにもなっていたんですよ。

――自分たちで演奏する場を開拓していたのですね。以前は演奏会のプログラムの中に、劇があったという噂も耳にしました。

足立さん　そうそう！ 7月のサマーコンサートの1部で1年生に劇をしてもらうんです。1年生にとっては初舞台になるのですが、劇は与えられた試練みたいなものですよね。嫌で辞める人もいました。でも先輩から後輩へ「劇を通して1年生みんなが仲良くなるように」というメッセージだったと思います。

――私たちは、劇はもちろん合宿もできていなくて、他にもコロナ禍の制限で様々な活動が縮小してしまいました。でも新たな試みもあります。昨年から、演奏会の様子をオンラインで配信するようになったんです。

足立さん　配信は色々な角度から演奏が見られてかっこいいですよね。私が顧問をしている瓊浦高吹奏楽部の撮影を担当している方は吹奏楽部のOBで私の同級生なんです。彼から「映像系の仕事がしたい」と相談されて「じゃあ、吹奏楽部を撮ってよ」とお願いしたところ、あっという間に九州中の吹奏楽部団体を撮るようになっちゃって。

――長大の吹奏楽部もお世話になってます。先輩方とこういった形で繋がりがあるのは、応援していただいているようで心強いです。最後に、今の吹奏楽部へメッセージをお願いします。

足立さん　学生が自分たちで集まって自主的に運営して、演奏会も年に2回行うというのは、実はすごい事ですよね。振り返ってみても、話し合いながら物事を決定するというコミュニケーション能力は、大学時代に養われたと思います。学生間で相談しながらサウンドを作っていくというのは、本当に特殊で、でも素晴らしい環境です。最近は九州大会に出るような団体だと、学生が主体的に運営を行うサークルは少なくなってきているようですが、長大は長い歴史があって今でもその運営のやり方が続いています。自信を持って、前向きに活動を続けてほしいです。

創部年：1979年（昭和54年）
部員数：80人
活動日：月・火・木／16:00～19:30
土／13:00～17:00
※合奏、大会・演奏会前等で変更があります。

パンフレットの中に
「喜格」さんというお名前を発見！
もしかしてこの人がキカクさん？

今回、現役の吹奏楽部員としてOBの方とお話しすることができ、新たな発見がたくさんありました。貴重な資料や滅多に聞けないお話しに、時間があっという間に過ぎていきました。そして、脈々と受け継がれてきた歴史に触れ、この部活の一員であることに誇りを持つことができました。吹奏楽部の活動をこれからもずっと続けていけるように、まずは日々の練習を楽しみながら頑張っていきます。

長大のサークルの中でもなかなかの大所帯。
経験者のほか、大学から別の楽器を始めた人や初心者など、バックグラウンドも様々な現役部員。

現在のキカク号。
楽器の運搬に欠かせない存在です。

12月17日に
第42回定期演奏会が開催されます。
最新情報はこちらから。

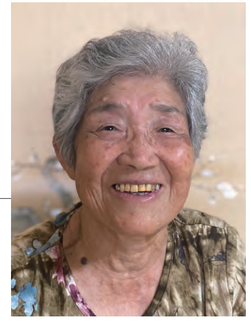
YouTube　X　Instagram

Saiyu Fund
［西遊基金］

寄附に込める想い

遠のいていたつながりを思い出すきっかけに

内藤啓子さん（旧姓:平松）　学芸学部小学2年課程修了（現在の教育学部）



内藤啓子さんは1936年生まれ。長崎大学学芸学部修了後は小学校教員に。一人旅がお好きで47都道府県を制覇されました。

1954年、長崎大学学芸学部小学2年課程に入学した私は、島原の実家を離れ、長崎市内の学生会館に入寮しました。学生会館は当時、東京や京都など全国に数カ所あった国立の寮です。唯一の女子寮だった長崎の学生会館には、市内の他大学や長崎大学薬学部の女子学生がいました。一番驚いたのは寮のそばに刑務所があったことです。目の前には差し入れ屋さんもあり、「ふくすけ」という名前だったと思います。一杯15円でうどんが食べられたのですが、実家からの仕送りは月3000円、寮費は2700円でした。たまに食べるうどんがとても美味しくて、思い出の一つになっています。

私が在籍していた2年課程は1クラス90人でした。短期間で修了できるとあって人気があったようです。先生は「秀才クラスだ」とおっしゃっていました。私はピンときていませんでしたが、大事にされていたと記憶しています。

私自身、学業にはあまり真面目に取り組んだ方ではなかったと思います。印象に残っていることといえば応用化学の授業です。それは教科書をなぞるだけの授業ではなく、先生が面白いお話を交えながら教えて下さる楽しいものでした。こんな勉強の仕方があるのかと驚きました。また、学業以外では「生活綴り方」という部活に入っていました。

大学修了後は郷里に戻り小学校の教員になりました。大学で得た学びを子どもたちのために活かすことができたのか分かりませんが、先日、教員になって初めて受け持った、もう60年以上前の教え子の一人が、「先生に」と育てたブドウをわざわざ届けてくれました。

2019年に届いた長崎大学校友会設立のお知らせは、長い年月が経ちすっかり遠のいていた私と長崎大学のつながりを思い出すきっかけになりました。このお知らせを通して、当時の私たちと同じように、今の若い長崎大学の学生さんが頑張っていることを知り、多くの寄附はできませんが、少しでも彼ら彼女らの役に立ちたいという気持ちになりました。いつまで続けることができるか分かりませんが、これからもこの思いを届けられればと思っています。

1949年、大村市乾馬場で発足した長崎大学学芸学部（当時の写真）。
文教町には1953年に移転しました。

旅先で仲睦まじい内藤ご夫婦。夫の智さんは学芸学部中学2年課程のご出身です。修了後は中学の教員を務められました。

Exchange Meeting

令和5年8月4日　長崎大学佐世保交流会を開催

8月4日、佐世保市を中心に本学の卒業生をはじめ、関連病院、お取引企業代表者などをお招きし、昨年11月の東京交流会に続き、第2回目となる「長崎大学佐世保交流会」を開催しました。

第一部では、河野茂学長が学長任期の6年間を振り返って、情報データ科学部開設など主な取り組みを述懐しました。

続く講演会では、本学が目標として掲げる「プラネタリーヘルスの実現」に関連して、大学院プラネタリーヘルス学環長の渡辺知保教授が、「プラネタリーヘルスとは何か」と題して講演を行いました。第二部では、西遊基金へ多大なご支援を賜りました、千住雅弘様（代理：東謙一郎様）への感謝状贈呈式を執り行いました。その後、引き続き交流懇談会に移り、和やかな雰囲気の中、多くの方が親睦を深められ、10月1日付で長崎大学長に就任予定の永安武理事の挨拶の後、盛会裏に閉会となりました。

参加者のアンケートでは、「プラネタリーヘルスの推進を続けて欲しい」「もっと詳しく内容を聞きたい」「長崎大学の取り組みを知ることができてよかった」などの好意的な意見・感想が寄せられるとともに、参加の企業様と本学との新たな共同研究に進展した事例も見受けられ、有意義な交流会となりました。今後も県内外で継続して開催し、本学に関する様々な情報を発信する予定です。（文中の肩書は交流会開催時のものです）

西遊基金

「西遊基金」は、長崎が長年にわたって培ってきた個性と伝統を基盤に、地域の発展から地球規模の課題まで、種々の問題を解決するための傑出した人材育成を目指した、長崎大学独自の修学支援、さらに教育・研究の幅広い支援を目指した基金です。

西遊基金は1000円からご寄附いただけます。詳しい情報はこちらからご覧ください。